2020 年度　FD・SDセミナー

「学生と共に考える ウィズコロナ時代の大学教育と学生支援」

本セミナーは、本学の教員と職員を対象として、高等教育の在り方や本学の課題について理解を深めることを目的として、東京都立大学ＦＤ委員会と総務部総務課の共催で行われるもので、今回で 14 回目の開催となりました。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、多くの授業がオンラインで行われることになりました。そのため本セミナーでは、この間に行われた学生支援や授業事例の課題を教職員で共有するとともに、初めて学生の声を直接聴く機会を設けました。

ここでは、その様子を紹介します。

1　日　時　　2020 年 12 月 4 日（金）15：00 ～ 17：15
2　実施方法　Zoom ウェビナーを使用したオンライン開催
3　参加者　　238 名（教員 184 名、職員 47 名、学生 7 名）
4　プログラム

【開会挨拶】
三浦　大助（総務部長）

【趣旨説明】
横田　佳之（大学教育センター長・FD 委員会委員長）

【職員報告】
小山　真由美（学生課 厚生係長）
永正　俊一（学術情報基盤センター事務室 情報メディア教育支援係長）

【教員発表】
中村　麻衣子（大学教育センター 准教授）
和田　圭二（システムデザイン学部 電子情報システム工学科 准教授）
西山　雄二（人文社会学部 人文学科 教授）
来間　弘展（健康福祉学部 理学療法学科 准教授）

【学生との座談会】
司会：松田　岳士（大学教育センター 教授）
学生：7 名
パネリスト：山下　英明（副学長）、横田　佳之（大学教育センター長）
近藤　伸彦（大学教育センター 准教授）、堤　克則（教務課 教務係長）

【閉会挨拶】
上野　淳（学長）

【総合司会】
岡田　有司（大学教育センター 准教授）

＜職員報告①＞
学生課厚生係の業務

学生課 厚生係長

小山　真由美

こやま　まゆみ

1. 学生相談業務

学生課厚生係は主に、学生相談業務と経済支援業務を担っています。

相談業務では、キャンパスへの入構制限が続いたため、対面での相談は中止し、電話相談を継続しました。学生が大学に来られるようになった6月29日以降は、感染防止対策をした上で対面相談も行っています。Zoomを用いたオンライン相談も必要に応じて行っています。

例年の傾向としては、年度初めの相談件数が最も多く、夏に減り、後期に増えるのですが、今年度は4月が少なく、夏の減少も少なかった点が特徴でした。これは、前期のコロナへの取り組みが一段落し、自分たちの心模様について思いを巡らせる時間が増えた為だと考えています。

相談内容では、コロナの影響を受けたものと思われるものもありました。例えば、オンライン授業による様々なストレス（課題提出や生活サイクル構築の難しさ）や、自粛生活で人と会わないでいることによる孤独感、学内施設を使えないことによる居場所の少なさ、家に居続けないといけないストレスなどが挙げられます。

コロナ禍で通常の学生生活のスタートを切れなかった学部1年生のために、8～9月にZoomを使ったグループワークを5回行い、不安などを共有する機会を設け、延べ28名が参加しました。

後期からはランチタイムカフェをオンラインで開催しました。ランチタイムカフェは、毎週水曜の昼休みに学生が一息つける居場所を提供する目的で2010年から始まりました。心理カウンセラーと心理専攻の大学院生も参加しているので、コミュニケーションが苦手な学生も安心して参加できるようになっています。

学生相談室では今後もさまざまな手法を用いながら、学生の精神的・心理的健康の為に役に立ちたいと考えています。

2. 経済支援業務

経済支援ではまず、前期授業料納入期限を4月末から7月末に延長しました。また、新型コロナウイルス感染症の影響により収入が急減した家庭への対応として、前期・後期とも受付期間を延長して授業料の減免を受け付けました。

日本学生支援機構奨学金や民間奨学金にも柔軟に対応し、収入が急減した家庭向けに受付期間の延長、募集機会の追加などを行いました。

学びの継続のための学生支援緊急給付金も支給しました。これは文部科学省の学生支援緊急給付金事業で、本学では一般学生・留学生計671名に1人当たり10万円、非課税世帯の学生には20万円を支給しました。また、本学独自の緊急支援金として、本学で募集した寄付金と独自財源を原資として800名の学生に5万円ずつ支給しました。

さらに、日本学生支援機構が民間企業や個人から受けた寄付金が、本学に助成金として交付されました。経済的に困窮していると認められる本学独自の授業料減免対象者（後期）のうち、学部1年生54名に2万円を支給する手続きを進めています。

また、保健室では4月に予定していた健康診断を、様々な調整と感染対策を工夫して10月に実施しました。今後も大学生活に不安を感じる学生や経済的に困窮する家庭が一定程度存在すると見込んでおり、引き続き学生支援を実施していきます。

Q&A

（岡田）学生支援緊急寄付金は学生からの申告が必要なのでしょうか。

（小山）学生から申請書が届いたものについて審査して、日本学生支援機構に推薦する手順になっています。

＜職員報告②＞
オンライン授業実施にむけた e ラーニングシステム kibaco の取組

学術情報基盤センター事務室 情報メディア教育支援係長

永正　俊一
ながまさ　しゅんいち

1. kibaco について

kibaco は、2015 年に運用を開始した授業支援システムです。授業の資料や教材を受講生に公開したり、レポートなどの課題を出したりすることがオンラインで可能になります。これまでは対面授業がメインだったので、kibaco を使う教員は多くなかったのですが、今年は非常に多くの方に使われるようになりました。

今年度はログインユーザ数が 9 月までで既に約 260 万と、昨年度の倍となっています。資料、課題、テスト、成績等が利用された件数も今年度前期だけで 4,908 科目となり、昨年度の 3 倍です。利用が一気に増えたことに伴い、様々な課題も浮上しました。

2. kibaco の増強

kibaco は前期に 2 回、増強を実施しました。4 月から準備を始め、5 月と 7 月にサーバー機器やメモリなどのシステム増強を実施することで、アクセス数急増対策を行い、環境を改善しました。

システム増強で苦労した点は、kibaco は授業がない夜間や日曜でも、授業の準備や課題提出などで使う教員・学生がいるので、メンテナンスで停止を伴う場合はできるだけ停止時間が短くなるようにしたことです。

工夫した点としては、コロナの影響でサーバー機器などの在庫がなく、市販の CPU やメモリも数年前のシステムである kibaco と互換性がないため、今回は学内の遊休機器を使うことで乗り切りました。物理サーバーを自前で運用し長期間使用すると、今回のように増強したいときに機器が無いことになるので、柔軟なシステム構成が必要だと感じました。

3. e ラーニング総合案内サイトの整備

学術情報基盤センターの教員と大学教育センターの情報部門担当の教員で、e ラーニング総合案内サイトを整備しました。内容を「教員向け」と「学生向け」に分類し、動画版の利用ガイドやオンライン授業の実践方法を追加しました。また、英語版も再整備しました。

苦労した点、工夫した点は、問い合わせが多いものは FAQ 化したことです。サポート窓口へ問い合わせを頂いても、回答までにどうしてもタイムラグが発生します。そこで問い合わせが多いものはできるだけ FAQ に登録し、先生方の疑問をすぐに解決できるようにしました。

また、関連項目は互いにリンクさせて、スムーズに遷移するようにしました。

最後に、メニュー項目を再整理して、利用者のクリック数を減らす構成にしました。今までの kibaco のチャットボットは階層が深いところにあったのですが、できるだけ表に出しています。

4. 今後の予定

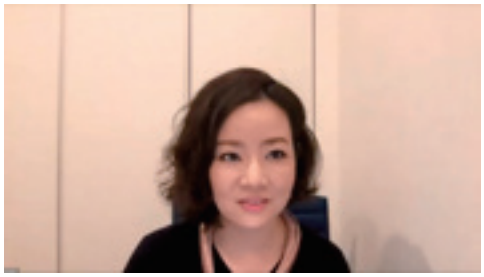
2021 年 4 月、kibaco がリニューアルされます。システム更新に伴い、kibaco のベースとなっている LMS ソフトウェアがバージョンアップされ画面構成が変わるほか、ユーザーインタフェースや機能が改善されます。リニューアル後は急激に利用が増えても柔軟に対応できるようにしたいと考えています。これからも引き続き kibaco のご活用をお願いします。

Q&A

（岡田） kibaco を、パソコンからファイルをドラッグしてアップロードするなどのインターフェースにする予定はありますか。また、kibaco の使い方について学生に対する説明会は今年度ありましたか。

（永正） どういうインターフェースになるかは確認中です。また、現時点で学生に対する説明会は予定していませんが、ご意見を参考に検討したいと思います。

＜教員発表①＞
実践英語Ⅱ　授業実践発表



大学教育センター 准教授

中村　麻衣子

なまむら　まいこ

1. 授業の概要

今回取り上げる「実践英語Ⅱ」は 2 年生向けの必修授業で、レベルは中級クラス、19 ～ 23 名の学生が在籍し、使用テキストは「British News Update 2」という BBC ニュースを扱う総合英語教材です。2 分程度のニュースクリップを用いたもので、社会的・文化的なテーマが多く、学生の議論を喚起しやすい内容となっています。

基本的には語彙の学習、リスニング、内容把握と進めていくのですが、対面授業のときはニュース原稿のディクテーションにかなりの時間を割いていました。元々ニュースクリップは教科書に添付されているパスワードを使用してストリーミング配信ができたので、予習として課してはいたのですが、一度見たけれど分からず諦めてしまった学生も多く、授業の場で改めて見聞きして確認する作業が必要でした。その分、授業では分からないという解答は認めないスタンスを取っており、聞き取りづらい語彙がどんなふうに聞こえたかなどをしつこく聞くなどして対面授業を進めていました。結果的にそれがクイズ的な要素や、クラス全体での発音練習へと繋がっていたようです。時間を多く割いて繰り返し聞くことで、リスニング力向上に寄与したと思います。

学生の反応が見えづらいオンライン授業では、まずこの時間をカットしました。前期の授業で 1 度しか聞いてこないであろう学生から「分からない」という反応が生じて授業が成り立たない状況に陥った経験を踏まえ、学生にはストリーミングで事前に複数回聞くよう繰り返し伝えました。そうしたこともあり、学生たちは非常に協力的で、繰り返し聞いて受講してくれています。

後期になると、「分からなかったけれどもこんなふうに聞こえました」といった声が聞かれるようになりました。とはいえ、多くの学生にとってイギリス公共放送の英語を聞き取るのは難しく、その手助けになればと前期の初めのうちにかなりの時間を割いて、発音パターンやイギリス英語の特徴について解説しました。今までも初回にこうした説明は行っていたのですが、実践を通じて音を実際に体感し、経験的に学ぶプロセスが対面では生じます。オンラインではそれが困難なので、初期にインプットを大量に行い、個人レベルで学習してもらうことにしました。そのあたりの定着度合いの把握は難しいのですが、ディクテーションに解答する様子を見ていると、個人の努力で着実に伸びていると思います。

2. 実際のオンライン授業

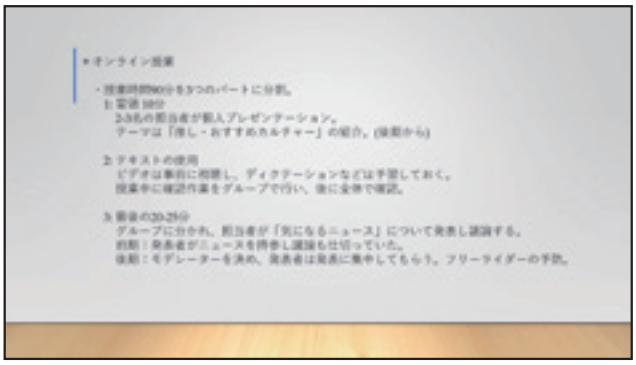
私のオンライン授業では、授業時間を三つのパートに分けています。

まず、ウォームアップを兼ねて冒頭 10 分で、2 ～ 3 名の担当者に個人プレゼンテーションをしてもらっています。クラスメイトの人となりが分って欲しいと思い、テーマは「推し・おすすめカルチャー」の紹介にしました。一見軟らかくて簡単なテーマなのですが、自分の好きという気持ちを分析し、客観的に言語化し、かつ自己開示も必要な作業です。嫌がる人も多いのではないかと心配したのですが、予想に反して皆さんしっかり準備して、資料も提示しながら発表してくれたので、とても楽しく良い冒頭の活動になったと思います。

続いてテキストに入ります。ブレークアウトルームを活用しながら、事前に指定した範囲のビデオを視聴し、予習してきたディクテーションの解答と内容把握を行います。私はこのブレークアウトルームを巡回しながら、様子を見て、質問に答え、最終的に全体でまとめる作業をしています。前期はグループの中に入って反転授業を試み、議論を促したこともあるのですが、入らないグループの議論が見えないことと、グループによる差が生じたことから、後期は行っていません。その分、最終プロジェクトとして学期末に行おうと計画しています。

最後の 20 ～ 25 分間で、ニュースのミニプレゼンテーションとディスカッションを行います。3 ～ 4 人のグループを決め、毎週担当者が「気になるニュース」

を用意し、それについて議論します。前期は担当者がディスカッションの仕切りもしていたのですが、負担が大きかったことと、フリーライダーがいた様子も見受けられたので、後期はモデレーター兼記録係を決め、担当者はニュースに集中してもらうようにしました。担当者はプレゼンテーション終了後、発表原稿とディスカッションを踏まえた感想をまとめて提出してもらい、モデレーターは担当が２周したら記録用のワークシートを提出します。



このコロナ禍で、学生たちは非常に意欲的に取り組んでおり、提出された原稿はなかなか骨太で充実したものが増えています。後期は担当者が当日欠席ということも生じたので、その際は私が資料を作り、グループに投げて、モデレーターに議論を動かしてもらっています。とはいえ、欠席していたけれども最後の時間だけ登場する学生もいるなど、グループのメンバーとしての責任感を感じながら受講している様子が伺えました。

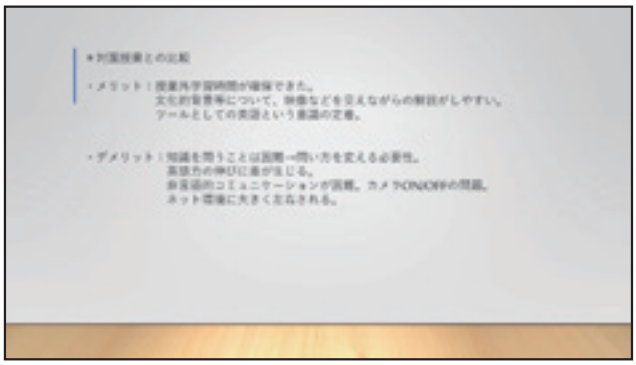
3. メリットとデメリット

オンライン授業では、語学のスキルと同じくらい大切な言語の文化的背景を解説しやすくなり、教科書の枠の外に出た、現実にコミットした生の英語に触れやすくなったと感じています。

対面授業と比べてのデメリットとしては、やはり成績評価が挙げられます。これまでどおりの知識を問う筆記試験の実施は困難ですので、問い方を変え、授業で学んだ語彙や表現を使って発表原稿などを作成し、学んだものを実際に使えるようにさせています。前期はやみくもに課題を出していたのですが、後期は回数を減らし、質の向上を意識させました。

全体もしくは小グループで発言・発表する機会が増えるに従い、英語の学習がツールとして認識され、自分の言葉としてアウトプットすることが大切だという意識を改めて持ったのではないかと感じています。また、チャットやメールなどで教員と学生の個人的なやりとりが増えたことで、良い意味でクラス内での同調圧力のようなものがないと思います。これはクラスの雰囲気づくりの問題と表裏一体ですが、周りに流されず、自律的に学習する学生が増えています。逆に言えば、周りに流されて頑張ってきた学生は伸び悩んでいるので、英語力の伸びに個人差が開いているとも考えられます。

特に前期はクラスの雰囲気づくりが困難でした。通信の問題もありますし、カメラオフにする学生が多いため、非言語的なコミュニケーションが非常に難しく、反応が見えません。対面授業では察することができた理解度が見えないので、こちらも臨機応変な対応が難しいと感じています。ネット環境に左右されてしまうオンライン授業の難しさを実感しており、ネットワーク環境の整備が急務だと思います。自発的にカメラオンにしてくれる学生が多いクラスは雰囲気づくりがしやすいとも感じるので、学生側のネットワーク環境も整備されれば、こうした問題も解決されるのではないでしょうか。



いまだ悩ましい点は尽きないものの、非常に協力的な学生に恵まれたことは大きな助けとなりました。私の授業でも、授業外学習時間の確保や自律的学習の習慣付けが達成できてきていると感じています。対面授業に戻った際にも、オンライン授業で感じたメリットを生かし、授業で得た知識を自分の言葉として発し、習熟させる作業を今後は積極的に推し進めたいと考えています。

Q&A

（岡田）ワークが多く含まれる語学の授業では、個々人の積極性に差が出る印象があります。オンライン授業に伴い変化はありましたか。

（中村）全体的に積極性が上がった印象があります。学生側もやらないといけないという意識が働いているのか、私のクラスでは全体的に積極的になりましたし、自発的な発言が増えたと思います。

＜教員発表②＞
工学系学生向けオンライン授業への取り組み

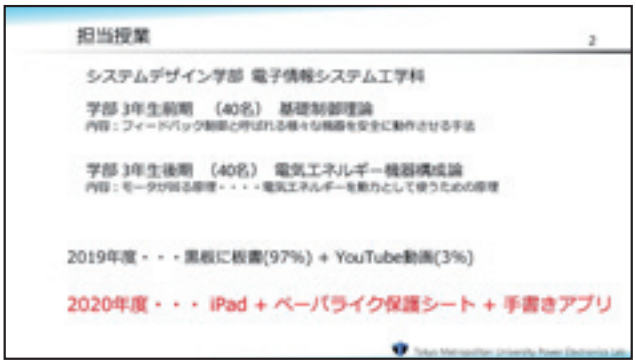
システムデザイン学部 電子情報システム工学科 准教授

和田　圭二
わだ　けいじ

1. 手書きアプリの活用

私は学部３年の専門科目を担当しており、前期、後期ともほぼ同じ 40 名の学生が履修しています。昨年度までは、黒板にひたすら書き続ける授業をしていて、PowerPoint などはほとんど使っていませんでした。しかし最近の工学系の授業は、実物のイメージをつかんでもらうことが非常に重要になっています。いろいろ調べると、YouTube で綺麗な動画を上げている方がいたので、ここ２～３年はそうした動画を見つけてきて授業で紹介していました。そうすることで、学生が授業に関連するものを見られる機会を、少しでも与えようという意図もありました。

今年度はオンライン授業になったため、どのような授業にするべきかかなり悩みました。私に合った方法をいろいろ探したところ、手書きアプリを使うことにしました。iPad にペーパーライク保護シートを貼付し、使用します。工学系ですので、図をどうやって描くかということを学ぶことが大事だと考え、手書きアプリの画面を共有し、図を描く様子を学生に見せるようにしました。数式に関しても同様に、式の展開や導出方法などを手書きしながら学生に見せる方法を取っています。



2. 現在までの取り組み

宿題は kibaco を利用して配布し、提出してもらいます。それから、授業動画は前期１回目の授業から kibaco にアップロードしています。

オンライン授業で私が非常に良くなったと思ったのは、宿題・演習・定期試験の解答を授業とは別動画にしてアップロードできる点です。そのおかげで授業中のストーリーが組みやすくなりました。今までは授業中に行っていたのですが、１回前の授業の話になってしまうため、なかなかいいストーリー組みができませんでした。別にすることで、授業が非常にやり易くなりました。

11 月末からは授業動画のアップロード先を YouTube に変更しました。この効果がまだ十分見えていないのですが、メリットとしては掲載できるファイルの容量が大きいのでやり易いことと、学生がいつ、どれぐらい見ているのかが分かることです。YouTube の解析機能を使うことで，これから様々な情報が集められると思っています。恐らく学生もスマホで気軽に見ているのではないかと期待しています。これまでの解析では、約２割の学生がスマホで見ているようです。

学生数 40 名程度で視聴回数が 20 ～ 30 回と出ているので、多くの学生が見ているのだろうと思いました。

なぜそう思ったかというと、視聴回数のピークが立っている２カ所が宿題の提出締め切り前日だからです。平均視聴時間は非常に短いので、恐らく学生は常に手元にノートを置いていて、ピンポイントで宿題に

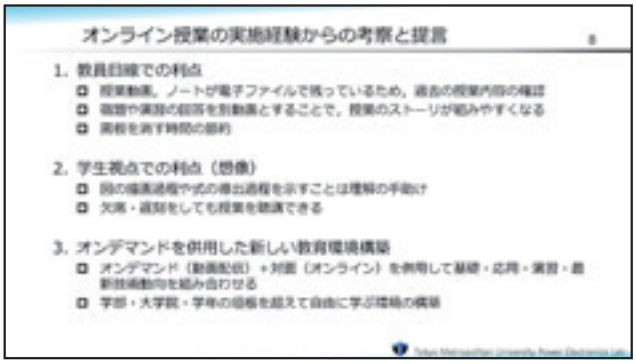
関係する箇所を見ているのではないかという感じがしています。本来は授業を半期通さないとこのような傾向は分からないのですが、YouTube に移行することでこうした情報が分かってきました。

今まで定期試験は紙を配って実施していましたが、今年度は、Zoom と kibaco、それから Google フォームのテスト機能を使っています。カメラとマイクは ON にし、質問はチャットで受け付けています。

3. オンライン授業の実施経験から

教員目線の利点としては、授業動画、ノートが電子ファイルで残るので、前回、前々回の授業内容で言ったことを確認し易くなると思います。先ほど申し上げたように、宿題や演習の解答を別動画にすることで授業のストーリーが非常に組み易くなりました。

学生視点の利点としては、図の描画過程や式の導出過程を示すことは学生にとって非常にいいということと、遅刻・欠席をしても授業を聴講できるのは非常に重要だと思いました。

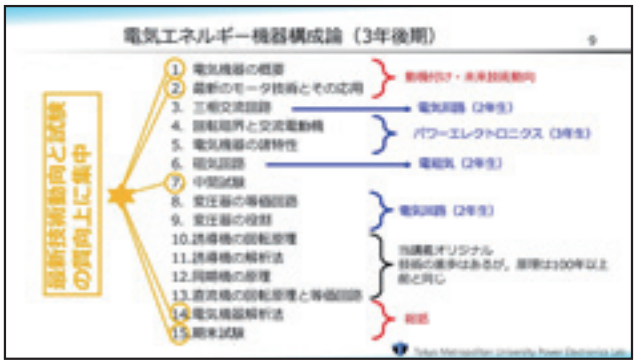


私自身としては、将来的にはオンデマンド（動画配信）授業と対面授業（オンライン授業を含む）を併用して、基礎・応用・演習と最新技術を組み合わせた授業の構築ができると考えています。

それから、工学系の講義はやはり数学や物理といった基本的なところがベースとなっているため、学生が学部・大学院・学年の垣根を越えて自由に学べる環境の構築が理想的です。大学院生が学部の数学の授業を見直すようなことがあってもいいと思いますし、そういう環境が構築できるきっかけになるのではないかと考えています。

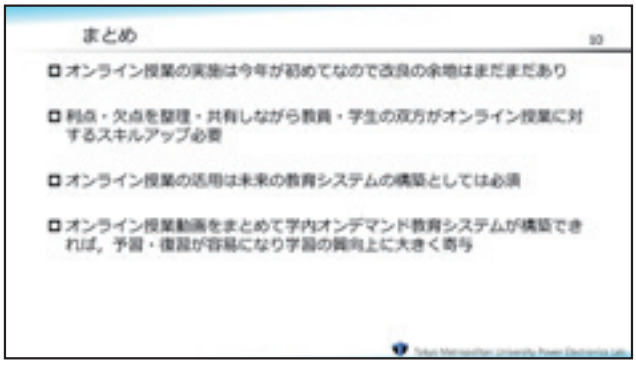
例えば、私の 3 年生後期の授業「電気エネルギー機器構成論」では、3 年生前期までに学んだ内容を学生が復習としてオンデマンドで気軽に見られれば、授業設計としてはここをかなり圧縮できます。

また、当講義オリジナルの部分は、原理は 100 年以上前からあるものなので、これを毎年話す必要はないだろうと思っています。むしろ最新の技術動向や新しい技術の展開などに集中した授業の組み立てをすることが、各科目の質向上につながると考えています。



今日お話しした内容はあくまでも一例で、私も今年度が初めてですので、改良の余地はまだまだあると思います。利点・欠点を整理・共有しながら、我々教員だけでなく、学生側も含めて双方がオンライン授業やオンデマンド授業のスキルアップをすることがもっと必要です。未来の教育システムはこうしたオンデマンド、オンラインが組み合わされたものになると思っています。

将来的にこうしたものが学内の教育システムとして構築できれば、学生は様々な授業を受けられることなり、学習の質向上に大きく寄与できると考えています。



Q&A

（岡田）kibaco で試験をする場合、課題とテストアンケートのどちらを使っていますか。

（和田）課題を使っています。kibaco は、試験する時に手書きのノートの提出に使用しています。レポート提出と同じような具合です。kibaco で試験をしようと考えたことはあるのですが、安定性の問題があり怖かったので、kibaco でのテストはまだしたことがありません。

＜教員発表③＞
学生と実践的に創造するコロナ時代の教育

人文社会学部 人文学科 教授

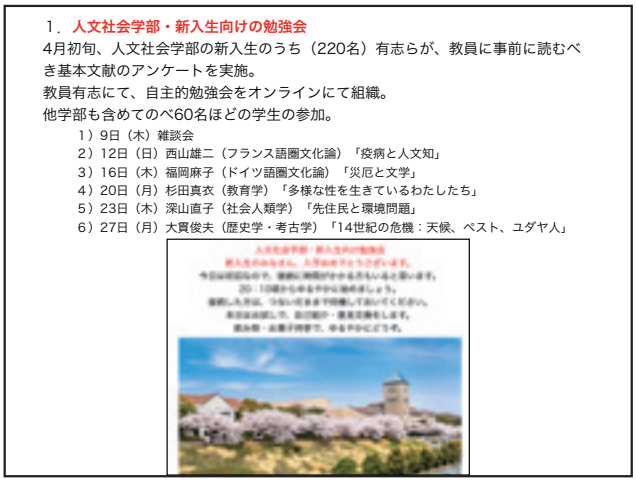
西山　雄二

にしやま　ゆうじ

前もって２点述べておきたいのですが、これは私一人で行ったことではなく、学生との教職員の皆さんで一緒に共同で作り上げてきた成果の報告だと思ってください。それから、授業内容だけではなく、その周辺の活動も含めて事例報告をします。

1. 人文社会学部・新入生向けの勉強会

今年度の人文社会学部の新入生の皆さんは本当に活発で、そのうちの有志が４月初旬に教員に対して事前に読むべき基本文献のアンケートを実施しました。それを受けて、私の方からそんなにやる気があるのであれば、自主的な勉強会をキックオフ的な感じでしないかともちかけました。人文社会学部の先生方と共同で４月中旬にオンラインでの勉強会を６回組織しました。人文社会学部だけでなく、他学部も含めて延べ 60 人ほどの学生が参加しました。



2. 前期・教養科目「人間・文化・社会」

前期は、教養科目「人間・文化・社会」を担当していました。例年 300 人以上が受講しています。人文社会学部提供のオムニバス形式の授業になっていて、同学部の１年生はほぼ全員履修します。毎年テーマを変えていて、今年度は「古典から学ぶ」という総合テーマの下、異なる専門分野の先生方が授業を行いました。

この授業の工夫としては、授業の後にアフタートークとして教員の雑談を 10 分ほど配信したことです。授業の続きの議論とか、大学に関する雑談です。例えば「今年の英語の授業の学生さんはどうですか」「留学していたときはどんな経験をしましたか」といった本当に雑談ですが、気づけば学生達が 150 人程残ってずっと聞いていました。視聴する学生は、休み時間に先生達の会話を聞くような雰囲気を味わうことができたと思います。

私は「フランス語 1」（初級）の授業も担当しています。語学の授業ですので、発音や対話の習熟のために、グループでの練習を Zoom のブレークアウトセッションを使って行っています。その際、少し長めの時間を取って雑談や情報交換もできるような余裕をもたせました。成果を披露してもらう際には、各グループから「今週の耳より情報」を報告してもらいます。「後期の授業が始まった」といった話題から、「鬼滅の刃」の最終巻が出たという話題まで、あらゆる耳より情報を報告してもらいました。そうすることで、学生の休み時

間を授業内で意図的、疑似的に作り出しています。ですから、私のクラスは本当に皆さん顔も名前も、どんな人かというのもお互いに把握していて、リアルなチームワークと同じくらいの結束力と雰囲気づくりができています。

「人間・文化・社会」に話を戻すと、7月6日には宮台真司先生と一緒に「コロナ禍と日本社会」と題した特別回を設けました。目の前にあるパンデミックについて、日本社会はどのような対応をしているのかという授業を臨機応変に行い、みんなで考える機会としました。

最終回では、「前期のオンライン授業、後期の大学」というテーマで討論会を行いました。教員4人と教務係長にも入っていただき、学生は特に1年生に参加してもらって、事前に設定した幾つかのテーマについて議論しました。ここで1年生の生の声を、彼らのリアルな感情とともに聞いたことは、とても大きな経験でした。授業が終わってからも延々と続き、「自分も発言したい」とパネリスト以外の学生も入ってきて、最終的には3時間ぐらい行いました。後から録画をYouTubeにアップしたのですが、見返すとドキュメンタリー映画のようなとてもリアルな議論になっていました。

3. 1年生向け学生証配付登校日

8月1日に学生証配付登校日が設けられていました。そこで、人文社会学部の時間帯に行って、皆さんに挨拶をし、そこにいた100人程の学生と共に、動画作品を作ることにしました。1年生はこの日初めてキャンパスにみんなで入って、1時間半ぐらいですけれども交流する時間を初めてもちました。1年生が嬉しそうに歓談したり、笑ったり、教室に入って驚いたりしている光景を目の当たりにして、私は本当に衝撃を受けました。なにか「奇蹟」のような場面に立ち会ったのです。この衝撃を受けて、私はオンライン授業をするにしても、対面授業をするにしても、このコロナの時代に、もっと自分なりに努力しなければならないと改めて思いました。

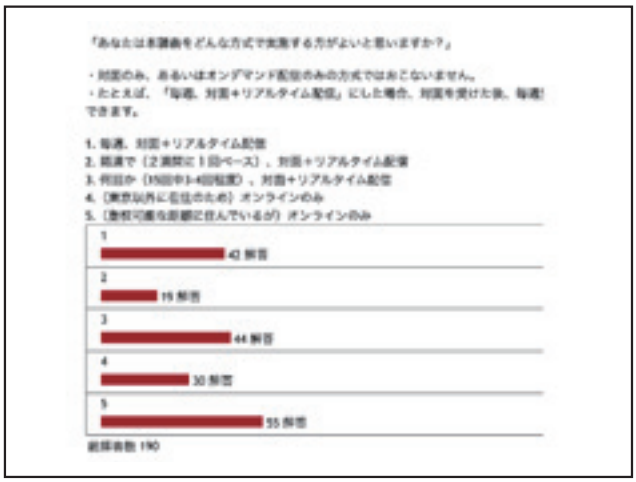
4. 人文社会学部1年生による夏休み自主勉強会

夏休み期間に学生がもう一度大学に来る機会を設けるため、自主的な勉強会を一緒に企画しました。ここで初めて対面とリアルタイムのハイフレックス形式の授業を試行しました。対面30名、配信30名が参加し、6名の学生が、前期に学んだことをそれぞれ発表しました。

5. 後期・教養科目「フランス語圏の文化」

後期は教養科目の「フランス語圏の文化」を提供しており、210名が受講しています。この講義ではまずアンケートを行い、学生の意見を聞いてみました。

「あなたは本講義をどんな方式で実施する方がよいと思いますか」という問いに対し、「①毎週、対面＋リアルタイム配信」「②隔週で対面＋リアルタイム配信」「③月1回ぐらい対面＋リアルタイム配信」「④（東京以外在住のため）オンラインのみ」「⑤（登校可能な距離に住んでいるけれども）オンラインのみ」という選択肢を設けたところ、①、③、⑤で意見が分かれました。そこで、中間を取って3～4回に1回は対面＋リアルタイム配信で実施しています。ただし、現在は感染拡大のため、オンラインだけになっています。



講義の工夫を三つほど述べておきます。

①オンライン授業で一番大変なのは、学生が授業の資料を印刷しなければいけないという点です。私は希望者150名にレジュメを刷って、事前に郵送しました。学生の皆さんからは「大変助かった」という声が寄せられています。

②次に、この授業では毎年ゲストを招いています。今年も志村響さんという本学出身者で、語学塾を経営している方をゲストに招き、外国語学習に関するトークイベント的な授業をしました。

③そして、フランス人の留学予定者との対話も重視しています。彼女らがまだ入国できない時、フランスからオンラインで受講してもらい、対話の時間も設けました。講義のある2時間目はフランスでは午前3時です。「朝3時からフランス人も参加しているのだか

ら、日本人の皆さんは頑張ってください」と発破をかけます。授業ではフランスのことを学びますから、彼女らとフランス語で対話し、「今日はフランスの教育について学んだけれども、どう思いましたか」というふうに、生のフランス人の声を聞くことで、より実感のある立体的な授業にしています。現在、フランス人の皆さんは無事に入国して隔離期間を経た後、東京でリアルタイムに参加しています。

6. 成果と課題

こうした一連の活動は、冒頭申し上げたように、教員一人の力ではなく、学生や協力してくださる先生方の自主性と創造性によって支えられています。今年の新入生は LINE グループを作って情報共有したり、交流したりするたくましさを持っています。彼らの自主性や創造性がなければ、こういった活動は成功できなかったと思います。

いくつかの課題も示しておきましょう。まず、技術上の改善が課題です。学生目線からすれば、対面と同時配信のハイブリッド形式はどちらでも選択できるので、一番便利な形式でしょう。ただ、技術的なサポートが必要で、すべての教員が自分で努力して効果的な授業ができるわけではありません。大学として技術的な改善をどうするのかが問われています。

次に、キャンパスライフの確保です。オンラインにするとかなり効果的、効率的な授業運営はできるのですが、それ以外のキャンパスライフの雰囲気や効果が欠落します。キャンパスの日常を何とか授業に盛り込むにはどうしたらいいかと工夫してきましたが、これからもこの点は課題になると思います。

東京と地方の問題もあります。私の授業の実感では、まだ 15％ぐらいの方が地方にいるのではないでしょうか。地方にいる学生との精神的、物理的な分断状況をどのように緩和していくのかが問われています。

そして、教育活動のアーカイヴ化です。単に録画された授業を記録としてそのまま残すだけでなく、私の場合は動画作品という形でかなり編集して残しています。また、教員がオンライン授業を見直せば、自分自身のファカルティデベロップメント（FD）効果、自分で授業運営を反省する効果がかなりあるので、そういった点ではとてもメリットがあります。

成果と課題

１）学生（新入生）の自主性や創造性
新入生は自発的にLINEグループを形成しており、困難な状況でも情報共有し交流するたくましさをもっている。彼らの自主性や創造性に後押しされるようにして、こうした授業や活動を成功させることができた。

２）技術上の改善
対面と同時配信のハイブリッド形式の授業をどこまで効果的に実施できるのか。

３）キャンパスライフの確保
授業以外のキャンパスライフを（授業内で）いかにして保証するか。

４）東京と地方
首都圏と地方（東京を忌避する感覚は根強い）の分断状況をいかに緩和していくのか。

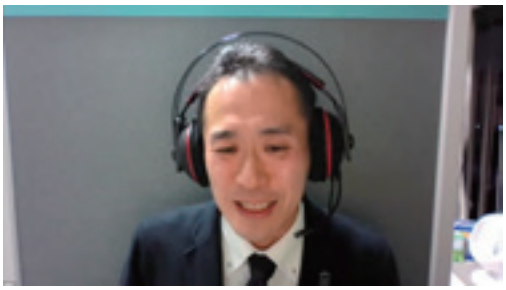
５）教育活動のアーカイヴ化
オンライン授業による教員の自己ＦＤ効果。

Q&A

（岡田）様々な工夫をされたとのことで、オンラインでも能動的に参加しやすい授業環境だったと思います。オンライン授業の方が周りの目を気にせず、発言しやすいと思うのですが、オンライン授業における学生の質問や発言は、対面授業と比べてどのような変化があったでしょうか。

（西山）前期の「人間・文化・社会」に関しては、私が司会を務めています。登壇者の講演の後に、私とトークを 10 分ぐらいしてから、質問を受ける流れになっています。つまり、先生が話してからすぐに質問を受けると敷居が高いので、まずは私とトークすることで話しやすい空気を作ります。そうすることにより、対面でもオンラインでも質問が出やすい雰囲気になると思います。

＜教員発表④＞
理学療法学科の実習科目の取り組み



健康福祉学部 理学療法学科 准教授

来間　弘展

くるま　ひろのぶ

1. 私の考える学習

理学療法学科では、2 年生以上に病院実習があります。私は首都大の 1 期生が 2 年生になったときに着任したのですが、この病院実習を乗り越えるのが非常に大変でした。学生がしっかりと知識を入れていないと病院に迷惑をかけますし、最悪の場合、病院から実習中止の申し出を受けることにもなります。当時は 15 ～ 20%の学生が留年または退学をするという状況でした。

そこで、とにかく 1、2 年生のときに医学的知識を詰め込む必要があると考えました。それから、別々の授業になっている基礎医学や臨床医学と、理学療法の評価・治療が結び付くよう指導し、病院実習に行く前に基礎的知識を整理させることを心掛けていました。

2. 昨年度までの試み

昨年度までは、教科書を指定し、事前に学習する範囲を指示していました。基礎的知識が分からない人は各自で復習しておいてもらい、授業開始時に kibaco を使ってテスト形式で知識確認をしていました。また、授業を一方的に行うと、なかなか学生の頭に入っていかないので、常に学生に質問を投げかけていました。実習科目では 40 名の学生がおり、1 人で教えることが難しいため、一部科目で TA や SA に一緒に入ってもらっていました。

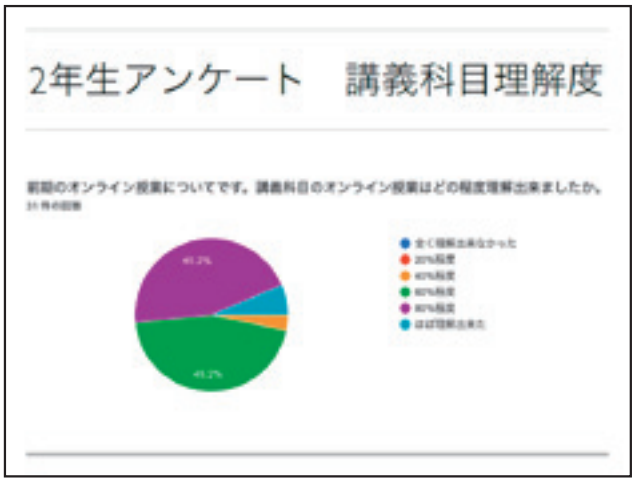
3. 今年度の新たな取り組み

理学療法学科の科目の多くは実技を交えており、「今年度はコロナ禍のため実技ができないのではないか」、「授業を前期と後期で組み替えなければならないのではないか」という議論が学科内でありました。結局、前期の授業は前期で行う方針になったのですが、その調整が非常に大変でした。

特に 2 年生は初めて荒川キャンパスに来るため、全く面識もありません。そこで、一部の科目では事前に基礎的知識を復習してもらうため、loom というソフトを使用して 5 ～ 10 分程度の事前動画を作成し、mediasite に上げて公開しました。

実技科目は、ビデオカメラとパソコンをつないで実技の様子を動画配信しました。学生 2 人にお願いして、1 人に患者役、もう 1 人にビデオ係をしてもらい、私が筋力の測り方などを実演して見せました。学生が同じように動けているか確認しなければならないので、教室のスクリーンに、学生 35 人全員の Zoom 画面が並ぶようにし、「動かしてみてください」という感じで、フィードバックをしながら指導しました。直接触るのとは全く違うので、かなり不十分だったと思うのですが、多少は伝わったと思います。顔を出すことに抵抗があった学生もいたと思うのですが、実際の教室で行っているやりとりもしながら、知識の定着を図っていきました。

Google フォームを使って 2 年生にアンケートを行ったところ、「講義科目をどのくらい理解できましたか」という問いに対し、約半数の学生が、80％以上理解できたと回答しました。



実技科目になると理解の程度がやや落ちましたが、私の想定よりも高かったと思っています。

「実技科目で困ったことは何ですか」という問いでは、「正しく行えているのかどうかフィードバックがない」という回答が一番多く、次いで、「一人で実践する場所がない」、「友達と相談できない」という順でした。「カメラをオンにすることに抵抗があった」という回答も4人ほどからありました。

前期はオンライン授業が中心だったのですが、7月頃からの対面授業ができるようになった時期と、8、9月の補講期間にまとめて実技実習をしました。その時期の2年生は、朝から晩まで学校にいた感じです。

後期に関してはいろいろ議論があったのですが、登校日を学年ごとに設定し、2年生は火・木・金、3年生は月・水・金に対面授業を行うことにしました。本来月曜日に授業を持っていた人が火曜日にシフトするなどの組み換えが必要となるため、事前に教員間で調整したのですが、教員が混乱する場面もありました。

4. 就職ガイダンスの代替

私は4年生の副担任をしているのですが、例年4月に実施される就職ガイダンスが中止となり、学生から不満の声が挙がりました。そこで、卒業生にお願いして、病院やクリニックの様子、就職活動等について夜間や土日にオンラインで話してもらいました。学生は自由参加だったのですが、8～9割が参加し、非常に好評でした。

5. 4年生の病院実習代替

それから、4～5月に実施される4年生の病院実習が中止になったため、学内で実習することになり、4月に3週間オンラインで症例検討を行いました。月曜日と水曜日に症例を出し、その日の夕方までに評価のレポートを提出させて、翌日（火曜日と木曜日）にその後の経過を示し、それに対して治療項目をレポートで提出させ、金曜日にグループに分かれて教員とフィードバックや質疑応答を行いました。11月末から12月25日にかけて残りの実習を学内で行います。卒業生にお願いして、オンラインで実際の患者さんの症例を出してもらうなど、病院に行けない分、同様なことを学内でできないかと工夫しています。

また、理学療法の教員になるためには、2022年4月から専任教員養成講習会が必須となるのですが、教育学に関する科目を4単位修めた人は免除されます。南大沢での講義がオンラインで行われたことから、何人かの4年生が教育学の科目を履修することができました。これはオンラインのメリットとして挙げられます。

6. 大学院での取り組み

それから、大学院の徒手理学療法コースも本来クリニックでの実習が必要なのですが、できなくなりました。そのためクリニックに来ている患者さんをビデオで撮ってもらったりして、オンラインで症例検討をしました。土曜日の午後から7～8時間、1人について1時間程度のディスカッションをして、かなりじっくり考えることができたので好評だったと思います。大学院のゼミもオンラインで実施しました。

今後の教育については、動画を活用して事前学習を効果的に促していきたいと考えていますし、対面授業が全面解禁になっても、一部オンラインを併用していきたいと思っています。特に大学院では積極的に活用していきたいと考えています。

Q&A

（岡田） 他の学部学科と異なり、厚生労働省の指針の確認対応も必要で、授業の年間構成を組み立てるのは相当大変だったと思います。国家試験対策も含めて工夫した点があればご教示ください。

（来間） 実習に関しては学内で代用できるということになり、他の大学とも連絡を取りつつ、本当にこの実習時間でいいのかということを十分に確認しながらやっていきました。国家試験対策は、学生を叱咤激励しながらやっている感じです。

学生との座談会

FD・SD セミナーとしては初めて学生と直接対話する機会を設けました。

◆パネリスト
山下　英明（副学長）
横田　佳之（大学教育センター長）
近藤　伸彦（大学教育センター　准教授）
堤　克則（教務課　教務係長）
◆司会
松田　岳士（大学教育センター　教授）

◆参加学生
樫村　日奈太（人文社会学部 1 年）
古俣　結夏（人文社会学部 1 年）
倉田　涼平（システムデザイン学部 3 年）
飯星　陽平（システムデザイン学部 3 年）
宮崎　優子（システムデザイン学部 4 年）
高階　ひかり（健康福祉学部 2 年）
吉田　哲樹（健康福祉学部 4 年）

（松田）ここからは学生と直接対話する時間となります。7 月に開催した FD セミナーでは、理学部の学生から「学生から見たオンライン授業」について独自調査に基づく発表があり、大変好評でした。本日ご参加の教職員の皆さまも「学生がどのような環境で、どのような思いで授業に参加しているのか」、「具体的にどのような支援を必要としているのか」は気になるところだと思います。本日は 3 学部 6 学科の 1 ～ 4 年生 7 名の学生さんにお集まりいただきました。

まず、今年度に受けてきた授業の感想を伺います。

（樫村）都立大ではいち早く Zoom のリアルタイム授業が全面的に行われた点が非常に良かったと思います。リアルタイムで授業があると、生活リズムもそれに合わせた形になっていきます。後期からは対面授業が幾つか行われるなど、学生と顔を合わせる機会も先生方が考えて設けてくださったので、非常に満足のいく授業を受けているという感覚です。

一方、改善点は 2 点挙げられます。一つは、教員が Zoom の使い方に慣れていない点です。その結果、授業の進行が止まってしまったり、最悪の場合、授業自体が無くなってしまったりするので、Zoom にもう少し慣れていただけると授業を受けやすい環境が整うと思います。もう一つは、kibaco に頼った授業形態が目立つ点です。先週、kibaco がサーバーダウンしましたが、授業によっては Zoom の URL だけがメールで通知され、パスワードは kibaco のみに掲載されている場合もあるため、kibaco が落ちてしまうと授業に参加できなくなってしまいます。1 年生はどの学部も苦労していたようなので、kibaco に頼り過ぎない授業形態を工夫していただけたらと思います。

（古俣）良かった点は、都立大のオンライン授業の質の高さです。西山先生も紹介されていたのですが、レジュメを印刷して郵送してくださったり、復習動画を kibaco に上げてくださったりと、学生がなるべく授業を受けやすいように工夫していただいているのは非常にありがたいです。

改善してほしい点は、連絡が遅いと思うことがあった点です。私は現在地方に住んでおり、もし対面のテストや授業がある場合は上京することになるため、なるべく早めに教えていただきたいです。前期のテストのときも、1 週間前ぐらいまで対面か、オンラインか、レポートかで迷っている先生がいて、それはかなり困

りました。コロナの状況は誰にも読めないので、先生方も非常に苦労されているのは分かるのですが、できれば早めに判断を下してほしいと思いました。

（高階）前期の授業で苦労した点は、本来実技や実習の授業がとても多い学科なのですが、実技・実習の授業が行えず、よく分からないまま進んでしまったことです。夏の短期間に集中して実技を行ったのですが、習得するのがとても大変でした。また、友人同士で直接会って知識の交流をすることができなかったため、新しい発見や勉強しやすい雰囲気、学習意欲の向上が得られませんでした。

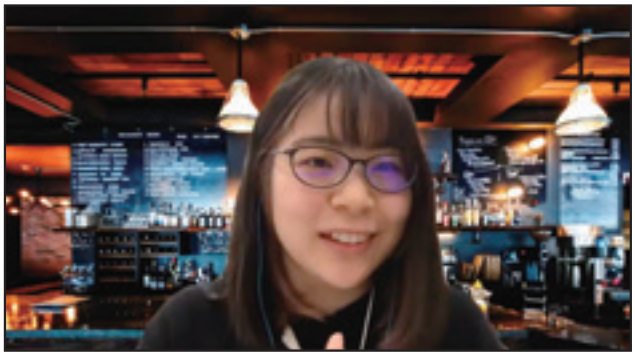
一方、オンライン授業を実技・実習の事前学習として集中して勉強し理解を深めることができました。先生方の工夫のおかげで「オンライン授業でできること」を最大限に享受することができたと感じています。現在、実習は感染対策を十分に取りながら行い、座学はオンラインと、それぞれのメリットを生かし時間を効率よく使って学習を進めています。荒川キャンパスでは、本来受けることが難しい南大沢キャンパスでの講義をオンライン授業で受講できるのもメリットだと感じています。現在はメリットの方が大きいと思います。

（倉田）３年生になるとグループディスカッションが非常に増えるのですが、オンラインでのグループディスカッションは難しいと感じることが多々ありました。理由は主に四つあって、一つ目に、話を振る人がいないと自分がいつ話しだしていいのか分からない点です。二つ目に、声が聞き取りにくいことがあり、それによって会話が止まってしまい、スムーズに進まない点です。三つ目に、一人が話していると他の人が介入し難くなる点です。四つ目に、相手の状況が分からないので、話している人がどう進めたらいいのか分からなくなる点です。

（飯星）良かった点は、自分が思ったとおりの学習環境が構築できる点です。オンライン授業により、自分の部屋で教科書を広げられますし、分からないときに対面では先生の目の前で Google 検索するのは恥ずかしくてなかなかできないのですが、オンライン授業だと Wikipedia などを見ることができます。また、1 限だとしても朝 8 時半ごろに起き、パソコンを開ければすぐに授業を受けられるので、朝が弱い私にはとてもありがたいです。

困った点は、先生や学生のやる気の差が顕著に出てしまうことです。すごく分かりやすい先生と分かりにくい先生がいることに困っています。

（宮崎）良かった点は、登校する必要がなくなったことです。例えば体調が優れないときなどに、無理に外に出なくても家で授業を受けられる環境になったのは、非常に良かったと思います。それから、授業の動画を kibaco などに上げている先生を多く見たのですが、授業内容を後でいくらでも見返すことができたので、とても助かりました。



改善点としては、授業時間に少しでも遅れてしまったときに Zoom になかなか入れないことがありました。そんな時に先生に直接連絡できる連絡先を事前に教えていただけるとよかったと思います。

（吉田）今までと変わらず普通に授業ができたということがまず良かったと思います。短所としては、通信トラブルの発生が挙げられます。特に発表の際などで通信トラブルが発生すると対応が難しく、復旧してもメンタル的なショックが大きいので、そのサポートが欲しいと思いました。

（松田）トラブルの話は、私たちも深刻だし、学生も深刻だと思います。ここで先生方からコメントをもらおうと思います。

（山下）同時配信、双方向型のオンライン、あるいはオンデマンドなどオンライン授業のいいところはたくさんあります。皆さんに話していただいたとおりですし、授業の質が保てる部分は、オンデマンド型で流していけばいいのではないかと私は思っています。

良くなかった点でも、少し気を付ければすぐに解決できるようなものもありました。例えば教員が慣れていないことや、連絡が遅いというのはできるだけ早い時期にお伝えするのは当然ですし、先ほど遅れると入室できないとおっしゃっていたのは、「Zoom の待機室」を解除しておけば済む問題ですので、こういったことは我々が気を付ければ何とかなると思います。

ただ、オンラインのグループディスカッションでは、どうしても一人一人の発言になってしまい、畳みかけるような議論はできませんし、顔色も察知できません。その状態でコミュニケーションを取っても、コミュニケーション能力がなかなか上がっていかないという問題はあると思います。従って、対面ならではのいいところもあるので、将来的に全部がオンラインということにはならないと私は思っています。

ですから、どうやって両方のいいところを取っていくかというのが課題になると思います。その大枠を作るのは簡単なのですが、実際にどうしていくかというのは教員一人一人の努力もありますし、学生の皆さんにも努力していただく必要があります。せっかく得た良いツールを使って、今までの授業とは全然違う授業ができるようになればいいと考えています。

（横田）樫村さんからの、教員が Zoom に慣れていないという指摘なのですが、後期になって教員側が少し慣れてきたような兆候はあるでしょうか。それから、古俣さんからはオンライン授業の質がいいと褒めていただいたのですが、授業動画をアップする場合、良からぬ学生が時々リアルタイムの授業をサボって、後で録画だけを見るような受講の仕方をしているという噂を聞いたりしませんか。今後の参考にしたいので、お答えいただければと思います。

（樫村）なぜ私がこういう改善点を挙げているかというと、実は後期になっても慣れていない先生がいらっしゃるからなのです。特に注意していただきたいのは、Zoom ミーティングとウェビナーでは仕様が異なることです。その点で後期になってもトラブルが生じていたのが気になっています。

（古俣）先生方が善意で上げてくださっている授業の動画を利用する良からぬ学生がいるのは私も聞いたことがあるのですが、やはり電波の不調により途中で退室となってしまう学生も多いですし、そういう人のための動画や資料だと考えているので、できればその点のフォローを先生方に継続していただけると嬉しいです。

（近藤）学生の皆さんから、本学のオンライン授業に対してかなり肯定的な意見を言っていただきましたが、逆にまだ心の中に秘めている物足りないことがきっとあると思います。今後もこういう場を設けて、もう少しその辺を深掘りできたらいいと思いました。

直接会えないとか、知識を学生同士で共有できないとか、雰囲気づくりや学習意欲を維持するのが難しかった、という面もあると思います。良いところも悪いところもあるので、オンラインでしかできないところと、対面でないとできないところをもう少し掘り下げて、良いところを取っていけるように来年度以降できるといいなと思いました。

（松田）最後に、皆さんは今後の学生生活の中で、大学にどのような支援を求めているのでしょうか。例えば教室、Wi-Fi 環境、施設面、学生への連絡、メンタル面などいろいろあると思うのですが、さらに付け加えたいことがある方はお願いします。

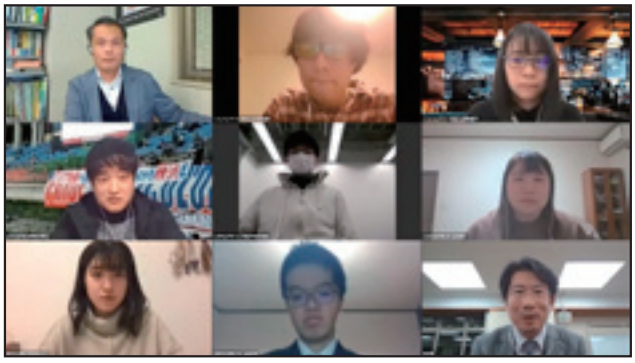
（樫村）1 年生の立場から困っている点として、サークルや委員会等への加入問題を挙げたいと思います。授業は学校が決めて発信していけるのですが、サークルはそもそも知る機会がありません。1 年生の間でも情報格差があって、既に対面で活動している人もいれば、古俣さんのように地方にいてサークルに入ることが難しい状況の人もいるわけです。対面での活動やオンラインの集まりがあるにも関わらず、そうした情報が手に入らない 1 年生もいますし、このままサークルや学

生自治会の活動を続けていけるのか、不安に思っている先輩方もおられると思うので、そうしたことも少し頭の中に入れておいていただけるとありがたいと思います。

（宮崎）授業全体の仕組みの話になると思うのですが、後期になって徐々に対面授業が増えてくると、1日の間で対面授業とオンライン授業の時間が混ざることになります。わざわざ何時間もかけパソコンを背負って学校に来て、対面授業の後に学内でオンライン授業を受けるのは負担になります。ですので、対面授業の曜日とオンライン授業の曜日を分けていただけるといいのではないかと思います。

（松田）非常に前向きな提案だと思います。それでは、これまでの発言を受けて職員の立場から教務課の堤係長、お願いします。

（堤）様々な生の声を頂き、本当にありがとうございます。kibaco に頼った授業運営という意見の中で、Zoom の ID やパスワードが見られなくて困っているという話は教務課にも電話がたくさんあり、何とかしなければならないと感じています。そういったときのバックアップは非常に大事ですので、そうなった場合でも学生に伝えられるよう、教務課だけでなく関係部局とも連携しながら、安定したオンライン授業を支援していきたいと考えています。これからも忌憚のないご意見をお寄せください。



（横田）我々は授業改善の取り組みを日々行っているのですが、皆さんのような学生の視点を取り入れた FD 活動をこれからも推進していこうと思っています。ですから、今後もぜひこういう機会にご協力ください。

（近藤）横田センター長と全く同じで、今後もこういう機会にぜひ参画していただきたいと思っています。

（松田）先生方、学生の皆さん、ありがとうございました。全学的にオンライン授業をする経験は、私たち教職員にとっても、学生の皆さんにとっても今年度が初めてだったわけですが、今回はまさに当事者である学生の声を直接聞けたことで、アンケートなどでは分からないレベルの示唆が多く得られたと思っています。ありがとうございました。

参加者からの声

- 他の先生方も自分と同じように悩みながらやられていることがわかりました。ありがとうございました。
- 学生座談会は非常に良い企画だと感じた。より突っ込んだ意見も聞きたいので、学部・研究科ごと、学科・専攻単位の機会も欲しい。
- 学生さんからのご意見が授業にとどまらずに、学生生活、サークルを含んでいたことに大変触発されました。大学生活は、授業、単位、その後の国家資格に向かうだけでなく、サークル、仲間との交流も含めてとのこと、再認識しました。
- 先生方の様々な授業の工夫が大変参考になりました。
- 大変興味深いセミナーでした。厳しい状況の中、各学部それぞれに工夫され、前向きに取り組んで姿勢が印象的で、もっと話を聞きたいと思いました。
- 職員は授業に参加していないことから、実際にどのような点で教員・学生の方々が困っているか見えにくく、想像に頼るしかない部分がありましたので、とても勉強になりました。